

# 令和7年度「東北大学学校ボランティア」活動報告

西塚 孝平<sup>1</sup>・照井 茉奈<sup>2</sup>

1. 東北大学大学院教育学研究科

2. 東北大学教育学部2年

今年度より、学校ボランティア事務局の運営は新しい顧問教員（第一報告者）と学生スタッフ（第二報告者）に引き継がれ、新体制を迎えた。本稿では、事業概要は従前どおりのため説明を省略し、今年度注力した取り組みの具体と今後の展望を報告する。ここで紹介する各種の取り組みは、過去20年分のセンター年報「ボランティア事業」を通読し、大切にすべき理念と優れた実践を抽出したうえで、それらを継承しつつ発展させることをめざしている。なお、報告書作成の都合上、本稿で言及している「今年度」とは原則として2025年4月1日から2026年1月31日までの期間を指す。

## 1. 活動の概要

### 1-1. 学生サポートスタッフへの対応に関する活動

事務局が設定した年間重点活動は2つあり、うち1つは学生サポートスタッフ（以下、SSと表記）との関係性を、事務的で業務遂行的なものから人間的で協働的なものに転換させていくことである。事務局の基本業務は、学内広報で募集したSSを、仙台市教育委員会（以下、市教委と表記）を通じて活動希望先の市内小中学校に派遣することであるが、学校ボランティアのねらいとする「学生の自分づくり（学校参加による地域教育の活性化と自身の社会成長）」を実質化するためには、SSとのあいだで信頼と責任を相互に引き受ける関係性を形成しつつ、SSの実践を高度化させるための教育的支援の整備と拡充を図ることが不可欠な要件となる。それらが不十分であるかぎり、ボランティアは参加実績（交換価値）として蓄積され、成長や変容の資源（使用価値）としての活用は限定的にとどまるだろう。SSの多様な参加動機と関わり方（2-1参照）が「自分づくり」へと確実に接続されるようにケアリングすることも事務局の主要業務の1つであり、この文脈において、「実践の高度化」はSSの支援技術の洗練だけでなく、活動を通じて深い学びを得ようとする志向性の高まりと、そのような情意面を支える学習方略（学び方や意味づけの仕方）、情動の自己調整（感情の扱い方）、社会的学習（他者との関わり方）に関する知識の豊富化まで射程に含める。

以上の前提を踏まえ、今年度は教育的支援ならびにケアリングとして3つのアプローチを試みた。それは、A) 登録時のニーズ・動機確認、B) モニタリング（活動報告や見学）、C) 振り返りの創出であり、特に活動報告と振り返りは、過去に事務局が運用していた「活動報告書」の様式を改良したものである。

A) SS 登録手続きに関して、従来は登録希望の旨を事務局にメールするように案内していたが、8 月より Google Form からの申請に切り替えた。これにより、1) 収集した情報を一元的に管理・分析する、2) 活動を通じて得たいこと、本事業を知った場所、活動時の不安などを尋ねる事前アンケートから学生の動機を把握し疑問点を解消する、3) 事務局の広報媒体に収集データ(登録/活動学生の属性、活動報告の記述、活動中の写真など)を個人情報匿名化処理のうえ掲載することについて許可を得ることを可能にした。

B) 事務局が把握してきた SS の動きは、希望の活動先を市教委担当者に伝えるところまでであり、実際の活動状況を逐次確認できずにいた。そこで後期より、活動日時、場所、移動手段、交通費発生の有無、活動内容、感想(学んだことや気がついたこと、今回の活動の良かった点、課題点、次から意識したい点)、困りごとなどの項目から成る活動報告フォームを、毎回の活動後に記入するよう SS 全員に求めた。また、学校見学(1-3 参照)を実施し、児童の支援をしている姿の観察や管理職・学級担任とのヒアリングで得た情報をもとに、SS の役割と期待、教職員と児童と SS の関係性について分析し、SS が機能する条件や相互理解を促進させる方略といった今後の活動環境づくりに向けた示唆を得た。

C) SS には継続的に活動する学生もいれば半期のうちに活動が一度もない学生もいるため、各活動の統合的な意味づけと事務局の運営改善の両観点から学期末ごとに総括させることは重要と判断し、SS には前期末(9 月)と後期末(1 月)に半期全体の振り返りを求めた。一度も活動をしなかった SS にはその理由を尋ね、活動をした SS には活動報告フォームの回答を見直してもらいながら自身の変容や特性への気づきを促そうとしたが、毎回の活動報告フォームと学期末振り返りフォームはともに回答率が良いとはいえず、活動報告フォームの記入は負担との指摘が複数あった。後期振り返りフォームに回答した 24 名(全体 55 名、回収率 43.6%)のうち実際に活動した SS は 6 名(全体 16 名、回収率 37.5%)いたが、活動報告フォームに関して、1 名がまったく報告しなかった(0%)、4 名がほとんど報告しなかった(25%)、1 名がときどき報告した(50%)と回答している。この点に関して、フォーム入力量を軽くしつつも、振り返りまでが学校ボランティアの一部であると認識してもらえるように働きかけることが今後の課題である。2 月に開催したボランティア・リフレクション会(1-4 参照)は学校ボランティアの理念を SS に伝える機会にもなり、SS と事務局のあいだで共通理解を図る端緒となった。

## 1-2. 広報に関する活動

もう 1 つの重点活動は認知度向上であり、以下の広報施策を展開した。1) 後期に入るタイミングで掲示ポスターを新しく作り直し、文科系総合研究棟をはじめ各部局の学生掲示板に掲示を依頼した。2) 高度教養教育・学生支援機構キャリア・社会連携支援センターのボランティア活動支援室が運営しているボランティア募集案内(川内北キャンパス教

育・学生総合支援センター1階)にポスターを掲示し、「東北大学ボランティア情報サイト」(<https://web-po6s.glide.page/dl/581904>)にも掲載した。3)後期授業開始直後に、教職科目担当教員に授業内や Classroom 上での広報を依頼した。とりわけ学部1年生は平日日中の活動が時間的に難しいことから、「社会科教育論」「教育の制度と経営」「教育相談・生徒指導II」「教育の方法と技術/教育とICT活用」などの上級学年が受講する授業科目にも周知を行った。4)更新が停止していた事務局 Web サイト (<https://www.volunteer.sed.tohoku.ac.jp/>)を刷新し、事業概要、活動紹介、登録手続きに関する情報を追加した。

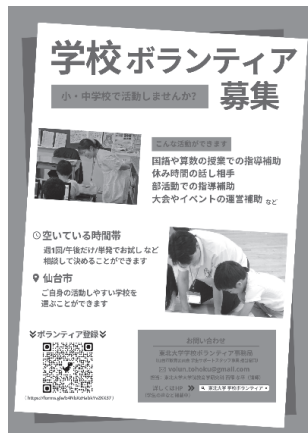


写真1 新規ポスター

今年度登録フォームに入力したSS29名による「本事業をどこで知りましたか(複数選択可)」の回答を延べ件数で集計すると、学内掲示ポスターが16件、授業内の宣伝・告知が8件、学校ボランティア事務局のHPが6件、知り合いから紹介が2件であった。事務局HPを見た人のうち2名はボランティア情報サイトに掲載した直後に申請があったことから、情報サイト経由で知ったと思われる。いずれの周知方法も一定の有効性が示唆されたが、半数以上のSSがポスターを閲覧していることから定期的にポスターを掲示し直したり、学期の開始期や終了期に授業担当教員を通じて周知を試みたりすることが特に望ましいと考えられる。

### 1-3. 見学

今年度、事務局では3回の見学を実施した。以下に概略を報告する。

#### ① 仙台市立A小学校の活動見学

日時：2025年9月19日(金) 13:15~15:30 場所：仙台市立A小学校

報告：スクール・サポートスタッフ事業を担当している仙台市教育局学校教育推進部の職員の方とともに、SS2名の取り組みを見学した。また、管理職や学級担任の先生方とのインフォーマルな会話から、SSを受け入れる学校体制の状況、児童や教職員への効果、支援者としてSSに求められる力の育成について理解を深めた。

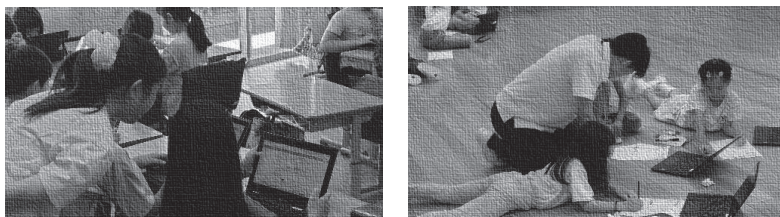


写真2 大学生による学習支援・見守りの様子

② 宮城教育大学「ボランティアディスカッション」の見学・企画学生インタビュー

日時：2025 年 11 月 19 日（水）12:30～16:00 場所：宮城教育大学 FCR Lab.

報告：「学校ボランティアを通じて学んでいる」先進的な取り組みから学び、本学でも同様の学習空間を創出するための知見を得るべく、宮城教育大学で実践されているボランティアディスカッション（以下、VD と表記）を見学した。当日は「若手教師が対応に苦慮しやすい児童（立ち歩きをやめない子など）との関わり方」をテーマに、30 名近い学生が参加した。企画学生によるファシリテートのもと、グループで問題状況の整理や解決策を議論しその成果を全体共有した。そのさい、VD のコーディネーターを務める現場経験豊富な就職支援アドバイザー（ボランティア担当）がグループワークを適宜支援し、対応方法も講義するなど、非常に密度の濃い内容であった。また、その後の 1 時間程度、VD の企画運営に携わる宮城教育大学生 9 名に集団インタビューを行い、コーディネーター職員との関わり方や、運営活動によって得られた経験、活動の難しさなどを聴き取った。事務局では VD に倣って学生主体の学習コミュニティを構築することを視野に入れており、VD 設計のプロセス、コーディネーター職員との連携方法、企画に関わることで得られる諸能力や人脈、集客の課題といった、学生たちの率直な語りに触れ、活動の意義と挑戦のリアルから多くを学んだ。



写真 3 ボランティアディスカッションの様子

③ 宮城県 B 小学校の活動見学

日時：2025 年度後期 13:00～15:00 場所：宮城県 B 小学校

報告：後期某日に B 小学校の教員から事務局宛てに外国人児童（低学年）の生活支援に関する依頼メールが届いた。対象児童は学習に遅れがみられるほか、日本語の理解が難しいことを主な理由として、日本の学校で生活するときの基本的なマナーや、子ども間での良好なコミュニケーションの取り方を覚えることに苦労しているとのことだった。児童と



写真 4 活動場所の風景

同じ言語を話せる SS がいなかったため、大学の事務局を通じて対象児童と同じ国籍の留学生に協力依頼をしたところ、学部生の C さんから快諾を得た。その後、Cさんと事務局

(第一報告者)でB小学校を訪問し、校長先生、担任の先生、日本語指導をしている講師の方から児童の日常生活や行動を聴き、個別指導を受けている対象児童に対してCさんが母国語を使いながら会話を試みた。児童は最初緊張した様子で単語をぼつりと言う程度であったが、好きでよく読んでいるという図鑑や国の本を一緒に見ながらCさんが優しく問いかけると、「好きな〇〇はこれ。理由は〇〇だから。」「これは〇〇。よく家でも食べる。」など母国語での会話が少しずつ弾んでいった。これにより、児童の興味関心に基づく活動を媒介としてラポールを形成し、生活行動の支援を行いながら、教科学習への移行も支えていくという方略がみえてきた。Cさんは少なくとも学期末休業期間、週1回の継続的な学校訪問を希望し、学校と相談のうえ、MIA(宮城県国際化協会)にボランティア登録をすることで交通費と謝金を受け取れることになった。県内でも増加している外国人児童生徒への対応として、本学留学生の貢献余地は大きいといえる。本事例は市教委を介した依頼ではないためCさんはSSに登録してはいないが、引き続き活動を見守るとともに、類似ニーズへの応答体制を構築していきたい。

#### 1-4. 学校ボランティア・リフレクション会の開催

日時：2026年2月10日(火) 11:00~12:00 場所：文科系総合研究棟5階503演習室  
 報告：VD実践を参考に、事務局の理念と整合するかたちでワークショップ型の学習イベントを開催した。目的は、1)SSに事務局の活動を理解してもらうこと、2)年間の活動をお互いに振り返り、意味づけてもらうこと、3)学校ボランティア活動をより良くするために、SSと事務局の協働に基づく学習コミュニティを作ることの3点である。当日の参加者は2名(教育学部2年生、3年生)だった。はじめに事務局から今年度の活動報告をした後、印象に残っている場面や難しさを感じた場面について1人ずつ語ってもらった。そのさい、現職教員の外山友氏(大学院教育学研究科修士課程)をゲストにお招きして、対応時のポイント、特に2名とも困っているという「見守りと介入の線引き」についてご助言いただいた。参加者からは、「児童との雑談で盛り上がりすぎて授業から脱線してしまうことに悩んでいたが、それは大学生の自分だからこそできる子どもとの関わり方だと分かり、逆に自信が持てた」「見守るか介入するかの判断は難しいが、担任の教育観が物差しの手がかりになると学んだ。また、児童への声かけでは、何をしているの?といった事実判断ベースで行うことにより、適切な距離感で交流できると分かり、今後実践していきたい。」といった感想をもらい、継続開催に向けた手応えを得た。

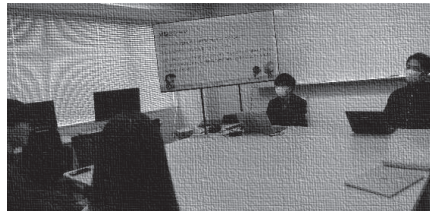


写真5 リフレクション会  
の対話の様子

## 2. ボランティア活動状況

### 2-1. 登録学生の基本情報

今年度、SSに登録した学生は55名であり、そのうち2024年度以前から継続登録している学生は10名であった。学年別では学部1年生が9名、学部2年生が13名、学部3年生が16名、学部4年生が6名、大学院生が11名である。部局別（学部と大学院は合算）は、教育が25名、文学が7名、医学が7名、工学が6名、法学が3名、理学が3名、農学が2名、経済が1名、公共政策大学院が1名である。昨年度のSS登録者数は32名であったことから、今年度は広報の成果が一定程度表れていると考えられる。

動機が教職志望に偏らず、多様な背景・関心のもと参加していることが、本学の学校ボランティアの特色である。登録フォーム経由で申し込んだ29名の教職志望の有無については、「強く希望している」が3名、「どちらかといえば希望している」が7名、「どちらかといえば希望していない」が13名、「希望していない」が6名であり、教職を明確にめざしていないSSも少なくない。彼らの参加動機の記述にみられる特徴的な単語を2つのタイプに分類したところ、教職を（強く）志望しているSSの記述は、授業、教え方、理論の応用、教育格差、教育現場といった学習支援や学校理解に関する語彙群から主に構成されており、教育内容や教育方法を応用して座学で不足しがちな知識やスキルを身につけたいことや、教育課題への関心から実際の学校現場に触れて理解したいということが書かれている。他方で、教職を（あまり）志望していないSSの記述は、関わり方、声かけ、距離感、コミュニケーション、心理的支援、適性などの関係形成に関わる言葉が目立ち、対人支援スキルの獲得や将来像の探索を求めていることがうかがえる。

このように、まずは現場を見てみたい、適性を確かめたいという動機を持つSSは一定数いる一方で、その動機の性質上、学校側の依頼内容との整合が取りにくい場合もある。活動頻度の希望も登録時に尋ねたところ、「まずは1回活動をしてみて、その後に引き続き活動するかを決めたい」が21名、「単発（1回だけ）の活動を希望している」と「継続的な（2回以上の）活動を希望している」がそれぞれ4名で、SS側では試行的な利用ニーズが高い。それに対して学校側は説明負担の増大や児童生徒の混乱を避けたいとの意向から、多くの依頼要請は継続参加が前提となっており、単発ばかりを歓迎することは難しい。学校側が継続的な参加を依頼条件に課すことで、参加への心理的ハードルが上昇し活動を躊躇する層が現れることも念頭に置いたうえで、学校のボランティア受入体制を調査し、動機と依頼をマッチングさせていくことも今後の課題といえる。

### 2-2. ボランティアの要請状況

今年度、本学においてSSに周知したボランティア要請は57件であった。依頼件数は4月が35件、5月が10件、7月が6件、8月が2件、9月が4件で、その他の月は0件であった。要請を受け次第、募集案内一覧に追記し、Classroomに掲載して周知を行った。

9月30日までは回答期限が過ぎたものは一覧から削除していたが、回答期限が過ぎていたものでも受け付けている場合があることから、10月以降は一覧に掲載したままとした。

### 2-3. 活動学生の活動実態

例年、登録者に対して実際の活動者は半数程度で推移している。今年度の活動者数は計16名で、昨年度の12名（学部生のみ）から増加し、大学院生も新たに3名が活動した。部局別に教育6名（学部生5/大学院生1）、文学3名（3/0）、理学1名（1/0）、医学2名（1/1）、法学部1名、工学部1名、農学部1名、公共政策大学院1名であった。なお、前後期振り返りフォームに回答した延べ17名分を見ると、1人あたりの活動回数は1～18回の範囲で、合計活動数は147回だった。また、同データによると最も利用した移動手段は徒歩が11名、地下鉄・電車が4名、自転車2名であり、自宅や大学近隣から最寄りの学校を活動先を選んでいようである。

引き続き、活動報告フォームと前後期振り返りフォームの回答データを整理し、サポートの対象、活動内容、活動を通じて得たこと、教育場面で抱えている困りごとを報告する。

今年度、SSがサポートした対象は小学生（主に2年生から5年生）と特別支援学級に通う中学生であり、具体的には、通常学級に在籍している児童生徒、特別な配慮を要する児童、特別支援学級に在籍している児童生徒、外国にルーツをもつ児童である。

活動内容は多岐にわたっており、詳細は列挙できないが、1) つまづいている子への声かけや説明や解き方の支援、2) 集中できていない子や出歩いてしまう子への注意や落ち着かせるための支援、3) 交流学級・特別支援学級・別室登校の授業補助、4) 外国人児童生徒への日本語指導や言語面の補助、5) 休み時間の遊び相手や話し相手、6) 給食指導の補助や掃除のお手伝い、7) 小テストの採点補助、8) 陸上競技会や校外学習などの行事・校外活動の見守りと運営補助、9) 体育の跳び箱などの危険が伴う授業での見守り、に整理できる。

活動を通じて得たことも個々様々でカテゴリー化は困難であるが、1) 現場の指導観・指導技術を直接学べたこと、2) 信頼関係がないと注意も支援も届きにくいと実感したこと、3) 心を開かない子も関わり続けると変化が生まれること、4) 支援が必要な子が通常学級でどう学ぶかを体感し考える契機になったこと、5) 1人に寄り添いつつ全体把握することの難しさを実感したこと、6) 子ども同士が励まし合う姿に心を動かされたこと、7) 教員の仕事像を体験し魅力を再認識できたこと、などが挙げられる。

SSが抱えている困りごととしては、1) クラス指定がなく「フリーで動いて」と言われるとどこへ行くか迷う、2) 既にボランティアや再任用の先生が入っており「自分がいて大丈夫か」と感じた、3) 質問に答えられない児童に対し圧をかけてしまうようで難しい、4) 勉強が分からない子への声かけの仕方や、そういった子で反応があまりない子への接し方が難しい、5) 授業内容が簡単すぎて飽きてしまい、他の子に話しかけたり出歩いた

りしてしまう子に対する声かけの方法が難しい、6) ノートを取らない・遊ぶ・突っ伏す等にどう関わるべきか(見守りか介入か)、7) 学校や教員とのコミュニケーションに関して多忙な教員に声をかけにくい、といった記述がみられた。

#### 2-4. 非活動学生・脱退の特徴

前期振り返りフォーム回答者 19 名のうち 8 名、後期振り返りフォーム回答者 24 名のうち 18 名は学期中の活動はなかったと報告した。その理由の内訳(複数回答あり)としては、「活動するための時間が取れなかった」が 17 件、「手続きが面倒くさかった」が 3 件、「活動できる自信がなかった」が 2 件、「交通費がかかることに抵抗があった」が 2 件、そのほか「やりたい活動がなかった」「学校側からの連絡を待っているため」等であった。交通費の自己負担や依頼事項の負担感が主要な理由にはなっておらず、募集案内一覧の「年間を通した派遣」や「長時間の拘束(一部の時間でもかまわないとの記述も多い)」などの文言を見たり、活動の具体的なイメージが持てずにいたりして活動を控えていることも考えられる。学校側からは週 1 回 1、2 時間でも嬉しいといった声も聞くため、要請依頼を SS 側の事情に合わせて柔軟に調整できる可能性を探っていくことも重要である。また、SS が学校現場でどのように活動しているかを紹介する資料や広報素材を作成し Web サイトや Classroom 上で公開することも有効と思われる。

後期振り返りフォームでは来年度の活動継続意思確認も行っており、回答者 24 名のうち 6 名が来年度の活動・登録を希望しないと回答している。その理由(複数回答あり)は「大学を卒業・修了するため」が 3 件、「ボランティアの時間にアルバイトやサークル等の課外活動が入るため」が 2 件、「ボランティアの時間に授業や研究活動が入るため」が 1 件であり、そのほか「外国人だから、いろんな活動を見た後、自分の下手な日本語でできないと思います」という留学生からの声もあった。2025 年度中に回答がない SS については年度末をもって登録解除することとしている(再度希望する場合は改めて登録する)。

### 3. 成果と課題

今年度は事務局運営の体制整備に注力した 1 年となった。総じて、学校ボランティアの原点である「自分づくり」に回帰するなかで、事務局の教育的支援機能を充実させる策を打ち出し、効果を検証し、定着させるというスキームの運用に着手できた。また、広報活動の展開と登録フローの改善が功を奏し、SS の登録者数が大きく伸長した。見学による支援体制の再検討も鋭意推進し、小学校現場や宮城教育大学 VD 参加を通じて、他大学の先進事例や現場のニーズを直接学び、本学で SS として活動する独自の意義もより明瞭になってきた。

一方で課題も山積しており、上記の取り組みによって出現した新たな課題と、既存の課題の両方を地道かつ根本的に解決することが来期への展望である。前者の課題でいえば、

フォームで収集した様々な情報をSSに即時還元できておらず、困りごとの多くが放置されたままになっており（1-4のリフレクション会で一部解消）、実践知の共有を速やかに進める必要がある。また、登録者数は増えているものの、実際の活動希望提出まで至るSSが少ないことから、SS登録時や応募時に活動内容を丁寧に説明するなどして心理的・物理的障壁を下げ、登録から活動への移行率を高める余地がある。後者については、事務局単独で解決できない課題ではあるが、マッチングまでのタイムラグ短縮とフォローアップ体制の整備も提言したい。SSの活動希望提出から学校によるSSへの電話連絡まで時間を要することがあり、SSから「学校からの連絡が届かない」との問い合わせが今年度4件寄せられた。連絡遅れや連絡漏れの発生源は現時点では特定できないが、SSの意欲が削がれないよう、確実かつ円滑な連絡体制の確立も重要である。